関　一雄先生の思い出

岩野訓子

文理学部十八回生（昭和四十一年度生）として入学した時、関一雄先生は新進気鋭の国語学者として、後河原の研究室で日々研究に邁進なさっていた。複合動詞の研究という生涯テーマをもっておられた。

二年次に国語学国文学科に所属した私たちは、関先生からは国語学概論、国語学演習などを教わった。「概論」では「古代、母はパパだった」の表現で音韻史に興味を持たせてもらった。上代から近世までの音韻変化を示す、そのフレーズは未知の荒野の道しるべのようで面白かった。研究室にお邪魔して研究者としてのいろいろを伺ったこともあった。「演習」では『大和物語』を素材に順番に下調べをして発表した。浅はかな説明しかできないので、先生の「根拠薄弱」の評語で一蹴されることが多かった。薄弱でない根拠など見つけられないのが、ヒヨコの大学生の常なので、卒論まで多用される語彙だった。しかし、その評語のおかげで、研究とは何をするべきなのかを端的に理解することができた。

また、楽しかったのは、単位とは関係ない輪読会であった。土曜日の午後、平凡社のシリーズ『日本語の歴史』3（言語芸術の花ひらく）の読みであった。日本語の広い野を旅する経験だった。また、『天草本平家物語』の輪読もあった。キリシタン資料は当時の音韻を知るのにうってつけだった。先生は学生を巻き込みながら勉強されていたのだと思う。国語学の基礎は「概論」だけでなく、こんな機会に知らず知らずのうちに教わっていた。

前提、データ収集、推論、立証、結論へと進めて、見えてくるものがある、というのが国語学の魅力だった。私には、国文学というのは何をするものかわからなかった。卒論は自然に国語学に向かった。結局確かな根拠が語れないまま、空疎な論（？）となったが、卒業させてもらった。わけもわからぬまま教壇に立ったが、そこはもはやアカデミアではなかった。アカデミックな空気は望むべくもなかった。現場の教員は学問とは遠い集団だった。居心地が悪かった。悲しかったので、母校の研究室とつながるよう努めた。学会誌への投稿、学会での発表など折々に関先生のお世話になった。心の平安を保つには研究書に浸るのが一番だった。母校は母港だった。やがて、国語学会に入会した。国語学会は、春季は中央、秋季は地方で開催される。春も秋も愛知からでは遠路だが、都合をつけて出席した。豊田から近い名古屋大学が会場だった時は、関先生の運転手に徹した。名古屋走りの横行する目抜き通りをこわごわ走ったのも懐かしい思い出である。

そして、九四年秋季大会は山口大学が会場となった。記念講演は関一雄山口大学教授による、演題「和文語サ変動詞「す」の役割―源氏物語の場合」。

この時期大学祭に向けて山大国文恒例の鷺流狂言の練習が行われていた。二十五年前、自分も（仕方なくだったが）舞台に立った狂言。この時も学生たちが熱心に演じていて感無量だった。私の時代の文理学部は後河原。一の坂川沿いに南下して行ったあたり、米屋町近くの寺の本堂の広間で、夜、保存会の方々の指導を受けて練習

した記憶がある。関先生は、練習を見に来てくださったが、今も変わらず学生たちの狂言を見守ってくださっているのだと感慨深かった。学舎は、姫山の横たわる平川に移転して人文学部となり、二十年以上経っていた。

関先生の学説は現場の古典の授業に大いに役に立った。何気ない小さな言葉を正しく解釈すれば物語の場面の人物が動き出してくる。先生のお説「あまり使われない用語を分析することによって使用度数の多い用語の性格が見えてくる」という好例が、いわゆる格助詞「して」の追究である。「して」は「物語用語としては、（略）サ変動詞の基本で捉えられるべき」（『平安時代和文語の研究』三六一頁）で、接続助詞又は格助詞として見過ごすべきではないと結論づけられる。

文系の高三では『源氏玉鬘』の巻を学習する。用例

法師はせめて、ここに宿さまほしくして、頭かきありく。

この「して」を諸注の多くは接続助詞と捉えて心情表現とするが、関先生は「〝泊メヨウトフルマッテ〟のような具体動作の表現」と説かれる。そう解釈すると、人物の動作がありありと見えてくる。そしてこの描写の直後に、玉鬘の一行と右近の一行とが相部屋になり、「めぐりあひ」が実現するドラマティックな場面がくる。小さな言葉をありきたりに片づけず言葉の基本に沿って丁寧に考えることが古典を面白くする。関先生はそういう仕事をなさったと思う。

先生は、山口大学退官後は（一九九八年）、梅光女学院大学に赴任され、しばらくして下関に単身移住された。独身生活を謳歌されているようだった。研究の方も着々と進んでいるようで、その都度抜き刷りを送っていただいた。私にとって十分刺激的で、研究方法を教示してくださったのだと思う。

いつどこでの学会だったか、小松英雄氏の発表に際して関先生が質問をなされた。論戦が面白く往年の大家の風格と論の鋭さに学問の面白さはこういうものかと思った。

退官記念の論文集に声を掛けてくださり、拙論をまとめた。汗顔の至りであるが、論考は楽しかった。折々に先生のお姿が浮かんだ。自分なりに自分を追い込んで、根拠薄弱でない論を目指したつもりだった。先生、これでどうかゆるしてくださいとつぶやいた。家庭と職場、二足の草鞋を履いて三十八年。何とか歩き切ったのは関先生のお導きのおかげである。

その後下関の梅光学院大学特任教授の任を終えられた先生は、生まれ故郷の東京に居を移された。そこでも研究生活は続き、「先行論文に振り回されず、自由に論考する」とおっしゃっていた。そして、傍ら源氏物語を読む教室を持っておられた。

幸い平凡な日々を送る中で好奇心を失わないように努力しております。東京に移り、始めました古典講座（のようなもの）も四年目に入り、今は『源氏物語』の紅葉賀巻を読んでいます。これ又好奇心旺盛な年配女性に支えられて続けています・・・

二〇一七年の夏のお便りの一節である。世の中に「源氏物語」講座は多けれど、「なんて幸せなおばさま達」と叫ぶとともに、関先生の溌溂たるお姿と明晰な解説が思い浮かんだ。

このお便りのころ、首都圏在住の文理学部十八回生に声を掛けて丸ビルで「関先生を囲む昼食会」を持ったことがある。元気なお姿に、一同「先生少しもあの頃とお変わりありませんね」と、われらは青春時代を思い出して感激した。次は卒寿をお祝いしましょうと話し合って散会したことだった。

また、この年の秋、私事が混じって恐縮だが、こんなこともあった。娘が住み着いた奈良の月ヶ瀬を散歩していて、梅渓として江戸期から有名な月ヶ瀬の由来を記した石碑を見つけた。なんと、刻まれたその碑文が中田祝夫氏の書によるものだったのである。区民会館を訪ね問うと、娘宅の隣家があの中田祝夫氏の生家であることがわかった。感動のあまり、関先生にお便りを出した。まじめに国語学を勉強してきたおかげか、過去が現在につながった。中田祝夫氏の『東大寺諷誦文稿の国語学的研究』をすぐ思った。月ヶ瀬から西に山を下れば東大寺である。上代からの歴史を思う。月ヶ瀬は由緒ある土地だった。

関先生からは次のようなお便りをいただいた。

若い頃を思い出すうれしいお便り・・・東京教育大大学院に在籍したのは昭和三十二年から昭和三十六年のわずか四年間でしたが、本当に充実した四年間であったと思い出します。当時、国語学担当の教授、助教授は、佐伯梅友先生、中田祝夫先生、馬渕和夫先生、のお三人でそれぞれ個性豊かな講義演習を拝聴することができ、幸せでした。またその頃は国語学会の事務局が教育大学にありましたので、毎月開かれる「国語学」の編集会議では時枝誠記先生、金田一春彦先生、築島裕先生他の著名な国語学者にお目にかかれたのも僥倖でした。中田先生は訓点語学の第一人者で御著書を次々と上梓なさっておられたので、そのオーラを身近に感じ取ることができました。御著書『古点本の国語学的研究訳文篇』の校正のお手伝いに御自宅に伺ったこともあります。その本の奥書に『月瀬文庫主人の印』という朱印が貼付されています。平成十六年に（中田）先生の卒寿の祝会が催され・・・云々

とあり、中田祝夫氏の故郷や、祝夫という命名の由来、生い立ちなどを記した、中田氏手書きの略伝（コピー）も同封されていた。中田氏の卒寿祝の会の賑わいが思われた。そして、往年の大学者たちの薫陶を受け、院生の頃から国語学者として歩み続けてこられた、関先生の真っ直ぐな軌跡が見えた。

関一雄先生、お世話になりました。
心よりご冥福をお祈り申し上げます。

（いわの・のりこ）

故 関 一雄先生へのお便り

樫 原 葉 子

今、王子で「お別れの会」が開かれているところですね。

先程一級下の旧 小林和子さんと電話でお話をしました。ご主人の江崎正典さんはご病気でした。夫とちょっとだけ話されました。